

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24510356

研究課題名(和文) 現代スペインにおける聖と俗：戦争犠牲者の記憶と祈念の諸相

研究課題名(英文) Sacred and Secular Memories and Commemorations about the Victims of the Spanish Civil War in the Contemporary Spanish Society

研究代表者

渡邊 千秋 (WATANABE, Chiaki)

青山学院大学・国際政治経済学部・教授

研究者番号：00292459

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代スペイン社会におけるスペイン内戦の犠牲者への祈念のあり方を調査・考察することを目的とした。宗教的な様相と世俗的な様相の交差する記念碑をめぐる、「歴史的記憶法」の適用以降、時の政治がそれらをどう扱い、どのようなコンフリクトがおき、そして人々がどのような反応をみせているかを、マドリードやアラゴンなどでの具体的事例を通じてまとめるとともに、内戦での戦没者とともに独裁者フランコをも埋葬する「戦死者の谷」という施設の在り方を考える特別委員会の動向に注目し、関係者とのインタビューや世論の分析を通じて、スペインにおける集合記憶の現状を提示した。

研究成果の概要(英文)：This research aims to clarify how the Spanish people commemorate the victims of the Spanish Civil War. We identified the conflicting meanings of the commemorative monuments and the Spanish collective memories about that war. National and regional politics were expected to resolve these conflicts about whether the monuments should be maintained or to be removed, but they still go on, even after the passage of so called "Law on Historical Memories" (2007). We researched the cases of monuments in Madrid and Aragon, with an eye on whether the people there want to sustain them or not, and what they want the local government to do about them. Furthermore, we also studied the case of the "Valle de los Caídos", the national cemetery which was constructed for the general Franco but also buries many Spaniards against their family will. We had interviews with the person concerned with the Special Committee on the future of the "Valle" and analyzed the public opinion on national memories.

研究分野：スペイン現代史

キーワード：スペイン 内戦 記念碑 集合記憶 国際旅団 世俗 宗教 カトリック教会

1. 研究開始当初の背景

本研究は H.21-23 年度基盤研究 C「宗教と国家：スペインにおける戦争犠牲者の祈念をめぐる一考察」を下地に、現在においても国民世論を二分するスペイン内戦の犠牲者をめぐる扱いについて、内戦自体、またその死者に関する記憶や人々の平和祈念のあり方について、宗教的な観点からはもとより、世俗的な観点から問い直そうとしたものである。特に記念碑に着目し、集合記憶の変化を探求しようとした。いわゆる「歴史的記憶法」(2007 年)の発布以降、内戦の勝者によって建設されたフランコ独裁体制を称揚する記念碑等の撤去が定められたが、同法が撤去に関する留保条項をもつ法律であるためか、その後の対応・処理は、地域自治体によって大きな差が見られるのが現状である。本研究を開始する以前に、サンタンデルやカタルーニャなどの地域では記念碑の撤去が既開始・また完了していたような例も多くみられたため、未だスペイン内戦関連のさまざまな記念碑等を保有している地域、たとえば首都マドリードや激戦地であったアラゴンなどでも記念碑の撤去は早晚起こりうると思定し、今後どのような状況で、撤去がどのような形で実施されるかをとらえ、問題を再考察しようとしたのである。

くわえて、「戦没者の谷」という、内戦での戦没者とともにフランコ自身をも埋葬する国立の埋葬施設をめぐる論争は、法律施行にもかかわらず起きていたばらつき象徴であると考えられたため、この施設のゆくえを討論した委員会メンバーに具体的なインタビューが行えれば、現況整理のきっかけがつかめると考えたと考えたのであった。

また他方、共和国陣営側については、撤去とはま逆の、新たな記念碑を建造しようとする動きもさまざまな地域にみられるため、その点も考慮にいれなければ、内戦がどのように受容され、その記憶がどのように形成されているのか分析することは大変困難であると思われた。

このような状況をふまえつつ、スペイン内戦が現代スペインに生きる人々にいかに影響をあたえている事項であるかを考察するとともに、このようなスペインという外国における国を二分した内戦の宗教的・世俗的な記憶のあり方を研究することが、将来的に日本の状況との比較研究に役立つのではないかと考え、研究に臨んだ。

2. 研究の目的

本課題は、「宗教は戦争の犠牲者をどう祈念するか、世俗化の進む現代世界において政治は一個人の戦争における「死」とその死を

めぐる記憶に対してどう対処するのか」という命題に歴史学・宗教社会学的な視野からアプローチすることを目的とした。

見方によれば、人間の死は無機質なものと考えることも可能であるが、戦争の結果として短縮された場合の死への思いは、社会の集合記憶として残存しつづける部分も大きいと考えられる。

戦後 70 年を経過して、スペイン内戦勃発時の対立構造は消え表面的には克服されたかにみえるが、実際のところ、人々は内戦に関する記憶に基づきいまだなまなましい戦禍を語り、多くの人々の死に思いをはせ、そしてその記憶を劣化させないように努めてもいる。そのような記憶の歩みの象徴は、新たな内戦関連の記念碑が建造され続けている事実に見出される。本研究では、古くからあるもの、新しくできたもの双方をともに対象として、内戦関連の記念碑に対して人々がどのような反応を示しているのかを明らかにし、最終的には、スペイン内戦という戦争の集合記憶の行方を考察することを目的とした。

現代では、スペイン内戦を直接的に体験した世代の人々が鬼籍に入る年代になりつつある。たとえば、現地では彼らの証言を残そうとするオーラル・ヒストリーのプロジェクト活動が行われている。一方、記念碑等の表象についていえば、フランコ陣営、共和国陣営どちらの犠牲を悼むのかによって、記念碑の扱いには差異が生まれ、いまだコンフリクトが絶えない現状がある。人々が記念碑をどうとらえているかはもちろんのこと、ことによっては記念碑の存在が政治に翻弄されている状況を視覚的に記録したいと考えたのであった。

そのうえで、スペインの外部にいる研究者として、出来る限り記憶をめぐる闘争を客観的な視野でとらえ、スペイン内戦に関する集合記憶のあり方を考察することを通じて、20 世紀の戦争の記憶に関する地域研究の一助となることを希望したのであった。また、将来的に日本のケースとの比較を行うことも射程にいれた調査研究を行いたいと考えた。

3. 研究の方法

本研究は、文献調査 現地での記録・調査をおこない、その両者を合わせてスペイン内戦に関する記憶のあり方の現状を提示し、記念碑等の表象分析を行うものである。

文献調査

これまでの先行研究、関連法の整理をおこなう。新聞その他のメディアにあらわれる記念碑をめぐる言説をまとめる。

スペイン国立図書館(マドリード) 総合行政文書館(アルカラ・デ・エナーレス)

マドリード市立雑誌新聞文書館、などに収められている関連資料を収集し、それらの内容を分析する。

これらの資料の整理、将来的な公開を視野に入れたうえでのデータベースづくりを行う。

現地調査

国民的埋葬施設である「戦没者の谷」の将来を考察する特別委員会が招集された後の研究実践でもあることから、委員会メンバーへのインタビューを敢行し、政治的にどのような解決方法が模索されているかを明らかにする。

現代のスペインの歴史・公民教育がどのようにスペイン内戦の記憶の形成に関わっているのかを知るために、近年、マドリード・コンプルテンセ大学に設置された「歴史的記憶講座」の関係者へのインタビューを行う。また内戦の生き残り世代の人々、また戦争犠牲者の家族等へのインタビューを行う。これらインタビューを文字に起こし、内容を分析するとともに、事実との照合を行う。なお、これらインタビューを行うに当たっては、プライバシーを考慮する。

マドリード・コンプルテンセ大学敷地内にある国際旅団記念碑をはじめとして、世俗的もしくは宗教的な意味合いをもつ代表的な内戦記念碑を定置する。そのうえで複数の対象を決定し、それらの定点調査を通じて、研究期間内に起こりうる記念碑の維持・撤去をめぐるコンフリクトのあらわれ方を映像、写真等の形で具体的に記録、蓄積する。

なお、フランコ独裁体制期に「公共の場」に設置された記念碑のケース、また本研究開始前夜において、あらたに建造された記念碑のケースなど、それぞれの記念碑の建造過程からすでに多様なものがあり、建造過程と撤去に及ぶ過程とのあいだの因果関係を考察する必要があった。

調査活動時はもとより、研究報告などを通じて、現地研究者との情報交換を行うことも具体的目的の1つであった。そうすることで、研究のための人的ネットワークをひろげ、今後の研究の進展を図るために役立てようとした。

4. 研究成果

スペイン内戦・フランコ独裁体制関連の記念碑をめぐるポリティクスは同じスペイン国内でも地域によってかなり異なっている。また地域政治当局がどのような政治色をもっているかによって、そしてそれに加えて、その時々政治的な状況により、記念碑がどのように扱われるかにも変化がみられると

ということが明らかになった。

たとえば、本研究にはいる以前には、研究期間内にマドリードではある一定程度の記念碑撤去が進展するであろうとの見込みをもって研究に臨んだ。しかしそれが現実となったのは、2016年3月、研究期間が満了しようとしていた時のことである。その意味で、本研究は期間満了になったとはいえ、今後に持ち越したものの多い研究であることは否めない。

そのような現状であることをふまえて、研究期間内に出すことができた研究成果について、以下述べたい。

実際、マドリード・コンプルテンセ大学構内にある国際旅団記念碑、アラゴン・ベラ・デル・モンカヨにある戦没者のプレート、マドリード、コンセプション教区教会敷地内にある戦没者信徒のプレートなど、研究期間中に記念碑の「定点観測」を行ってきた。そこで見られた反応を記録することができた。落書きなどのいたずらにあう記念碑もあれば、町議会決議をへて、ともかくも現状維持、撤去なしでいくことになった記念碑もあり、また、人知れずいつのまにか、私的な空間へと移設される記念碑も存在し、「歴史的記憶法」が条項を定めようと、ある意味、その条項にある例外事項をつかって、現状維持に近い形で対処しているケースが多数あることがわかった。現地調査によって得た写真を時系列で比較すると明らかである。具体例としての報告発表、活字化にいたったのはマドリード・コンプルテンセ大学構内の国際旅団記念碑と、アラゴン地方ベラ・デル・モンカヨで、町の中心広場に面する教会の壁に架けられた戦没者プレートのケースであるが、その他にも多々、事例データを蓄積することができたのは大きな成果だといえる。ただし、特に2016年に入ってから、記念碑の存続の行方が定まらず変動が起こっている最中であるため、データベースを完成させることができず、未だ公開には至っていない。

またスペイン人の内戦観、戦死者への深いおもいと政治的コンフリクトの原因を考えると、死の概念をめぐる宗教性と世俗性とのあいだの境界について考察するプロセスに入った。実際、辞書定義をみると、「脱宗教性」「世俗性」を意味するスペイン語の単語(laicidad)自体、王立アカデミー辞書での定義を与えられたのが近年のことであったのが明白になり、直接的な因果関係であるとはいえないものの、戦争の死者を「非宗教的」に扱う記憶のあり方は問題視される傾向が強いという事実への伏線が明らかになった。

「戦没者の谷」の将来をめぐる特別委員会

の政府への答申等については、カタルーニャ州モンセラットのベネディクト会士である H. ラゲール氏からそのメンバーならではの貴重な情報を提供していただいた。また研究期間を通じて、F.モンテロー博士(アルカラ・デ・エナーレス大学名誉教授)、F.セグ氏の協力を仰ぐことができたことは、研究を進展させるうえでの大きな支えであった。

本研究期間中、マドリードで2度ほど行った学会発表を通じて、現地研究者とのネットワークをつくることができ、将来的な研究の励みとなっていることも付け加えておきたい。

また、資料読解・分析を通じて、日本とスペインとのあいだの戦争の記憶をめぐる接点が浮かび上がってきた。1930年当時、現在のようなスピードを望むべくもなかった情報伝達状況のなか、日本の言論はスペイン内戦を自分たちなりに報道しており、また日本在住のスペイン人が、スペイン内戦報道をつうじて日本社会との関係を深めようとしていた意図を見いだすことができたのは、二次的な産物であるとはいえ、今後の両国間の文化研究を射程にいれるとするならば、大きな成果であったといえる。

2016年にはいってから、カタルーニャ地方トルトサにある内戦記念碑をめぐる、撤去か存続かの議論から議会での投票の末にその存続が決定された。また同時期に、マドリードの墓地に掲げられたプレートが撤去されたのちに人々の反対運動で再び元の場所に戻されるなど、本研究期間終了間際になって、軒並み具体的な動きがみられている。スペイン内戦の記憶をテーマとして研究するという事は、実は常に動的な対象に対してより開かれた臨機応変な対応が必要であることをあらためて思い知らされた。このような直近の変動については、資料収集を継続中であり、近く改めて論稿を提出する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

渡邊千秋: 「フランコ独裁体制下のスペインにおける日本映画『殉教血史日本二十六聖人』の上映をめぐる」『青山国際政経論集』青山学院大学国際政治経済学会, 2015年, 183-196.

渡邊千秋: 「スペイン王立アカデミア編纂『スペイン語辞書』第23版への見出し語「ライシダー(laicidad)」採用について」『青山国際政経論集』青山学院大学国際政治経済学会, 93, 2015年, pp.183-196.

渡邊千秋: 「国際旅団記念碑をめぐる攻防、2013年の動向から」『青山国際政経論集』青山学院大学国際政治経済学会, 91, 2014年, pp.47-61.

渡邊千秋: 「『記憶の場』としての『国際旅団』記念碑: マドリード・コンプルテンセ大学構内での設置をめぐる衝突」『青山国際政経論集』青山学院大学国際政治経済学会, 90, 2013年, pp.45-61.

[学会発表](計 2 件)

Chiaki WATANABE: “Las imágenes de la Guerra Civil Española en el semanario gráfico japonés “Asahi Graph” (1936-1939)”, en el Congreso Internacional “Imágenes de una guerra. Carteles, fotografía y cine en España, 1936-1939. Madrid, Campus Getafe de la Universidad Carlos III, 27 octubre 2015.

Chiaki WATANABE: “¿Para quién están colgadas las lápidas?”, en el Congreso Posguerras. 75 Aniversario de la Guerra Civil Española. Madrid, Campus Ciudad Universitaria de la Universidad Complutense de Madrid, 4 abril 2014.

[図書](計 4 件)

Chiaki WATANABE: “Las imágenes de la Guerra Civil Española en el semanario gráfico japonés “Asahi Graph” (1936-1939)”, en Beatriz de las HERAS (ed.): *Imágenes de una guerra. Carteles, fotografía y cine en España (1936-1939)*, Madrid: Universidad Carlos III, 2016, 158-169 (CD-Rom. ISBN: 978-84-92987-56-6)

渡邊千秋「第10章教会・国家と脱宗教化」立石博高編著『概説近代スペイン文化史』京都: ミネルヴァ書房, 2015年, pp.226-249.

Chiaki WATANABE: “¿Para quién están colgadas las lápidas?”, en G.GÓMEZ BRAVO y R.PALLOL (eds.): *Actas del Congreso Posguerra*, Madrid: Editorial Pablo Iglesias, 2015. (CD-Rom. ISBN: 978-84-95886-69-9)

渡邊千秋「カトリックに根付いた世界観」宗教」坂東省次編著『現代スペインを知るための60章』東京: 明石書店, 2015年, pp.249-252, pp.244-245.

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

写真等を掲載したホームページをアップする計画は未完である。2016年3月以降、大きな動きがありデータの大幅更新が見込まれているため、公開には踏み切れていない。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡邊千秋 (WATANABE, Chiaki)

青山学院大学・国際政治経済学部・教授

研究者番号：00292459

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：